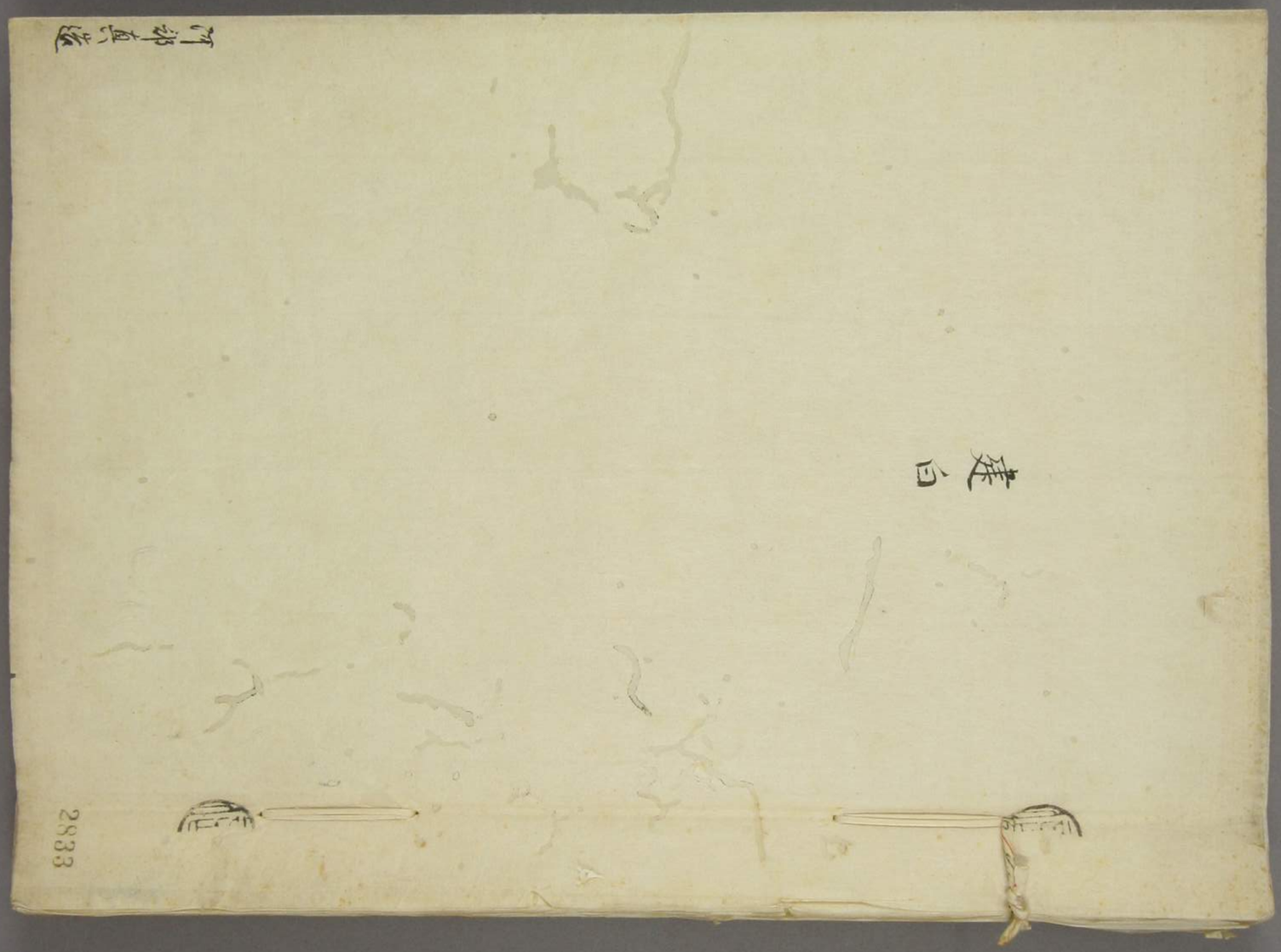


2833

114
A 4097
1

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

早稲田大学図書

作恐謹而奉申上作

私儀ハ肥前長崎ニ賤民ニ而浦賀奉行所ニ召人ニ賣買ス

不拘

皇恩を奉辱第一ニ部

國家ニ浦為ニも可相成心掛志部ニ付ニ而ハ幼稚ニ

時分ニ母ニ父師ニ教誡を受ケ生涯不忘恩義

ニ分其前給ニ而ハ部ニ而ハ放蕩不頼ニ成長仕候ニ教拾年

ニ光陰ハ瞬間ニ作間時態ニ変遷仕今日

皇運再興相開申

聖世に遭遇仕候ハ、實以眞加之極大幸之至存候間

其上博く建言上策を為　容

國家有益の策ハ仮令忌諱に牽觸仕候事ニ而も毫も憚

有御座敢白可仕旨策を

御布告之趣不堪感激仕候之列公卿を

始天下有道之士を登庸せらるる

皇國永久之御深策を公議尤詳しく

王室を輔佐せらるる仕之日を遠ス　國律齊整を仰き

可申候之御座候得共嵐雨之旁何と可奉申上

様ハ無御座候得共邊鄙育ちし遺弊なく

天威を不奉顧胸中之愚意一白仕候迄之方今

王政　御一新之折柄舊弊之

御國典ハ大小となく追々御廢し義事御復古仕為在候得共

今さら急に要し大事件ハ御復古不相成し候御座ハ

什一言誠以不致に極奉冒萬死仕申上事に御座候得共

用出度

御代と奉遂歓喜之餘り粗乱仕候事と

御寛恕被下度候

御裁量之為奮伏下亟作極伏白奉願候

之御時世と遠ひ今や外国御交際之

御国勢日増更彼洋夷富国強兵火技器械之巧術を逞し

四海并呑之牧畧を懷き或ハ利餌を以民心を誘ハ或ハ理解

を以播紳之士服し百計千方して釁を窺ハ之抜ハ折柄御度

作得ハ　邦内之兆民に存ず

皇恩を無へ之世忠勇節義之心を一致して方向を正し

皇威を萬国に赫輝し給ふ之大基礎を　御立可被為遊候

之急務成事ハ中上作近も世御度作必定枢要し御方く

御策畧可有御座候日下民し可奉諒察候之世御度作

御布告し御上之身自奉窺作之唯外面し制度文物を而已

御変革有し弊之朝之

御布令ハ久御改兎角眼前之　御小利之為　御心を

為勇作而門ハ民心を塞め外ハ洋夷を伏せ〻遠大な
神思慮雖為屈於たる愚見仕申候
皇大御邦ハ古〻より　神別と称し民俗正直にして義勇を
重んし君子国之名誉海外に高く　国家豊饒蛮夷も
武威に畏伏　神国振ふ産物今ハ彼洋夷ゟより
蔑視せらるる人民義気おく唯財利を競ひ上下一致和合
せすして憂慨奉脳
震襟作　国俗と相減居尤外見る所見ゟ所ハ一列と
神法令に随ひ
王化洽さる〻〻〻淫婦し淫容に順従して内心り
貞操なさる如く第一緩急に時節ゟ盛り作得て
始終我身し安全を謀り或ハ強弱を観望し或ハ家産し
盛衰を慮り或ハ洋夷に心我寄せ或ハ長上し矢策を笑ひ
表ハ巧みに媚を述新を淫内心大和魂を忘国して
神国し為に義を望んを者ハ千百人中に壱或茂稀得
寄存作但小民のこなるべ士古支以上に成叶習風押移品

作計為然る時ハ

皇統連綿之

高御座を護を謀み守り給らんや是恐く過慮之歎言に堪

作得共古人之宿も煙を見る犬成事を知り角を見る牛なる

事を知る猶ハ猶遠しとの歎ぬく方今之時情与ハ千歳之

後ハ如何成行可申計扨も我国之冠絶之

御列之　万国雄ハ今何也之事と相見へ作計墨国之愚民

長大息共仕合を涙産作之来

皇邦ハ一方孤立之て世界之事情に不達倫安を以志と之

荏苒歳月を経て漢土人之如く自の尊大之て太平と

蔑視之而已成狀之為に手負却而遁使せられ漫輙こも

立直る為さ近代之形勢を及ひ作成に付此度涼き

御趣意を以交源之道ハ安二念為用彼之長を取我之

短を補ひ我国番通之公法を以我世之御基礎為立

上下協同和合之て宇内之形勢を辨し

皇国一大草之て

皇威を海外に赫輝せしめ作ハ此時に在り敢為しとす

帝英断を以更始　帝一新し

帝開業を為さ作ハ資以千古不拔し

帝草創時勢相応し清俊言論し及ふ所之を清度作然に

在恐近日之

帝政布を変作て唯其名有り其実為る所之清度ハ其

故如何と之奉中上作て今試に

皇国と和親人し各国と比較仕ハ大小を論し作得る彼ハ

十餘国我ハ一国蒸機火技し術ハ彼ハ未我ハ未兵器航

海に於る彼ハ老練我ハ新習貧富を論し得る彼ハ

宇内に貿易して其利を集め我ハ再興し仕組中其余

百工し蒸具日用し諸製を近彼を以標準とせさるの

なし然時ハ我し心ハ彼ハ彼ハ我し心を挑み

何日し日に

皇威を海外に赫輝し為ん為ハ基礎し成功を俟ちて

先漢土を模せ作べし

朝典を改定し給ふとし名ハ相互に海を隔て方向を知
らしむるとき寡ハ衆に不相見候却て洋夷し奸謀に陥り
皇民をして彼が虜奴となるしむる事を目を救ふ可き侍に
似く所謂前門虎を逃て後門に狼を招く機会に陥る也
洋技洋学を採用し候を不宜と奉申上候ハ毛頭無之候
大技戦艦器械し河窮理測量航海し精等皆彼が
長を採用して長を以て短を特んて宇内に縦横を欲し其な
ば我が十具を悉用して抗対不仕ハ侮辱を蒙り
可申に付洋学傳習し候も時勢相愈専要く候に付度候
件とも欧米国普通し公法とも候ハ年来心見に委し
非ス恩考仕申ハ却て本末内外先後等し軽重を能酌量
して変置不致候ハ大に国家を誤り候定理に付度候
今日し事情を以国民上下一致して
皇恩を感戴仕真忠真義し心を為抱度候ハ本也内也
洋技修学し事ハ是に比べくハ末也外也可申候其故ハ
如何程洋技洋学に熟達仕候共心に義気無し候ハ

小児し弄花よりも清間敬却の国害し助力と相成可申
仮間民心を蠱む魔さし帰京之迚　御池漸に遊廻仕り
終こハ外物し為こ内心しを奪民心離教仕洋夷を
憂慕し
皇国を誅戮いたしなく国家衰乱に可及ハ必然し勢こ御座仕
先私儀民間こ離居仕親し洞見致之情態こ而教の空論こ
世間座仕ち之ハ孔孟も忠信を主と仕と申先則
皇国之人民こおいて肝要く
神別之
皇恩を辱へ　帰国大切こ繕之真情を以本心し主と為之
仮令こ御座仕百官士ち之ハ及申上匹夫下郎こ至迄
皇国こ生之出る心を不持者ハ之人或ハ御座仕潜て培養
之道其面さを不得仕時ハ漸こ変性仕申仕候前相ハ武将
政権を掠り
皇家之裏微こ及仕義其激之由而来教学之ハ中朝以来唐
制を換して

朝典を汝為之作より既に根ざせりと識者の論も有しかば
左候其須臾ひこ漢士人の
皇國を覬覦を新有之しは故唯相將の凌辱を請ふ迄に付
偶
聖明の主に為　出作時古今日の如く平然として改權
渡一仕は得共今は洋東刮目して隙を窺ひ五作得共
美一民危し離散之業に彼等牧畧を遂ては再度
擅御恢復之御計は無疑産作古人の語も夫人自侮然
後人侮之家必自毀然後人毀之國必自伐然後人伐之と
見へて如何程外人隙を窺ひ奸計を巡らし強自侮自
毀せばして上下和合確守仕作時古何し免さ事も無
作得共　邪近日の情態を考見作に上下深情は下に
不通下は上に命を侮り小吏は己に名利を事ひ上を欺き
下を凌き或は自國の疆を蔑ろ外人に媚び各我一分の
僥倖を樂みとして上下一致の心を以
皇室を守護して真福に安んず作形容御も不相見殆と

自伐自毀し有様に仏法の次第に沙汰仕隨分衰運を
挽回し
國光を海外に輝し外敵も畏服して勇名を窺ふ事を
得ざるべしむ教化を厚くし民百姓女子に至迄節
義し道理を弁へ上下金鉄心を合一して
皇上に奉公可仕し心根を花すむる事今日し急務勢
に而沙汰仕法度改令固より　國家の大道に仕得共
只是を乃ち如何程
沙門一新相成仕共只外體を飾慈を施す迄に而人し心根を
変化して寛意に固め仕候ハ難有仕孔子も衛國し
民し多きを見て而先ず教をかへんとそし孟子も
善政不如善教之得民也とも申し去迄儒道をもと
して國人を教化を致事ハ失措に至りと仕　舎人親王
し沙門に神道を立ること儒佛を以羽翼とせ度しとハ
最尊き沙門様迄に而其以儒佛し道盛んに行ひ　親王も
垂二て佛信者に沙汰し勝れ流石に古代し遺法を法為

守神道を以て根とすべきこと萬古不易の本体なり
然るに後世は何もし事にも儒道を以て主とせざる事なき
為に本邦の神道は衰微枯槁仕り候様に成り
本邦は強ち祭禮神事祭等のみ専務
皇國を保護し給ふ為に
天津神之立定め給ふ道に御座候得共時も
御等閑に罷成為成り候教に御座候哉恐
天皇陛下之
御職掌にして此尊き神道を以萬民を教育し給ふ事
則
天御中主神を本始諸
天津神別て
天照皇大御神に祭りを捧げ給ふ為に大本成る故に
天皇之御政事を
皇國に為はまりこれ例に御座候
皇國乃ち本のごとく天地間有様に國古は諸

孝德天皇之　詔紀に惟神我子應治故寄と相見へ
其他古事記書紀等に其例不少　近代に至ハ
神道ハ佛道と並稱し世外の道なり盛行但支那
神道之長流ハ光達而
御慶案ハ　仰付渡来之國之人民に神道の尊
大なる事を教へさせ
佛靈頼と伝へ賞德と勸化し
皇佛邦を保護し移る　佛盛典相互不少前文
今其の要を大事件者　佛侵古不相成し伝歷
伝と言上仕ハ則ち儀に伝歷作
皇國神道古傳說之ハ最も掛卷も
神魯命
神魯美命　之　天御中主尊　傳へ　皇　天津祖　大祖命にて
至真至正　之ハ也も渡の記妙成道理に伝歷第　漢学者
生像心之元を考見ハ時に如何も清明多流延奇怪
淡し　妙の渡世　賞之　世不拔　確乎不可拔し常理相備
り作道代窮理測量等し学大に相開　賞多　真之

極深玄妙の事精密に相成候て適し今迄無理と思ひ
定めし漢土し流伝なる其謬り成事し冰然として顯はれ只
皇國神道うく古傳乃ち今こそ正真成し事し益著明に
浮度作私儀五ヶ年之間潛藝仕候是而已に家族を
苦め身命を要神くく美國し古傳と照合探究仕我
邦神道し真實正教成事を發明仕候是偏
神國に生れ出し測り知なき
神し御恵みこそ實に不知所謝御恐尊畏敬し

要實正教を明らかに基傳教宗門等し貴僧に於煩疑
正傳を晴ます此儀に言伝道影歌ヶ敷次第に法度の
本然を明らく

神道に有

天津神
國津神こそ　御加護に依る金く湮滅して地に墜る事を
不得今般
王政　御一新し御代と相成候とたに此古正傳し真光を
幸見出作候志實に不可思議に奇遇に自今

皇威を四海に光被可仕前兆と歓喜踊躍仕候方今
都下におゐても
皇国学を修行之徒多く　浮世活法為在浮説矢張
漢学の者流し奥義を究のまゝ教化し実用に相成
こゝ六ヶ敷く長文物数浮説　神儒道
得失を大畧奉申上候作
天津神之天地を開の世蒼生を化成し給ふ御おいて各人し
異方に只神道し深理を略刻て賜典し給ふ故元来固
誰人に不拘私欲我意に方ち本然し良能に立帰り自有察仕
候時に
天津神し天上に在して万事を主宰し給ふ英人い実徳に進む
為つ之事　本分也に理い為に得るし候て漢土に
おいてハ彼老子より以下諸教人其中にも孔孟し始さる
千古不凡し人物故に深く此理に貫通し自ら勉強困苦
して功徳を積其所説も実践を経たる教訓なるに如何
も深切にして自然と　神道し推て此理に依て

事も多く世度仕間天下の為国の教を誹謗仕作者ハ
ゆゑ〻悪ハ元来自力〻段用なるゆゑ人智〻及ぶ限り〻ハ
邪教〻神業〻ハ
神霊頼を不事ゆゑ〻ハ孔子の学問ハ純ら仮〻言論教
法ハ涼切〻世度の為ハ道〻正論ゆゑ故ハ凡人〻ハ
施して実域実地〻徳我を通ず事一出来不申ハ不得道
〻正論とハ古来為安定を以所ハ明ら所ハ人も道ハ
猶路のごとくとハ性来〻道理〻ゆゑ作ハ〻ハ
落着安定を以ゆゑなくして叶ひ為其用為ゆゑ為ハ生涯
論を誠論を渡り為善道〻正論とハ為ハ後〻迷ハ為其益
なる為ハ〻為富貴〻安定を以為なるハ頼国〻仁〻為
其論窮〻子孫〻福分を拓く為なるハ仏教の説教〻為
窮〻今石を遺ハ為欲安定とせば屋敷〻ハ為ハ人世〻
多〻其外古人〻事跡〻為ハ天道福善禍淫〻信〻翻
其事一参為独負作仮〻我　神道〻教ハ
天津神〻人類を化生〻て万物〻霊長と為ハ定也

神慮を深味を辨ずる事を欲せば先勢ひを見別道を正鵠
を見を初めざれば人百生涯を何業何為とか一日者
不相足唯飲食妄楽して子孫相續を欲人し金
道と謂り矣へ作故孔孟し教者也を仁義道徳を
説く妻養屬し飢渇を救ふ為ハ間合ひ独り扶ける
人氣と相成終に財利し為ハ君父をも捨て仁義忠孝ハ
虚飾と相成り孫子漢晋以後し法儒仏道を主張
し弘通を後其方達国より貴賤し功徳もなく唯
事理を取り他し説を辨駁を欲勤し新著し
書ハ汗牛充棟及び可も真理一定不仕万枝の流
矣涌逼し成而已ハ繁民間も押移り終に讀書を欲
者も動もすれば博識し誇り議論を好み人を侮慢し
偶ハ繁を通り者ハ文章字句を及び後し学問教化ハ
只文筆し一藝と成り貴徳を進む者ハ甚稀に有し
中ハ吏学問し貴用を不肖者ハ唯自己し分を修め
賢者ハ先己を備めて人に及ぶし易き易婦近所

各其所を得せしめ給ふ天下を平定し給ふを以て真に学問とは
此儒門第一義にして邪正儒者流に教化を施し文武
成就不仕ひを思ひ孔子も脩己以安百姓堯舜其猶
病諸と申し給ふ貴情淳厚作君平章道に心鵠不立と
教導に規則安成故に淳厚作世人君に理に富さ
故に時世に形勢に託付道徳仁義は古代に事と申始り
不取合者も有し甚以て遺憾に存じ奉る時勢に流れ
真の道に不法に依形事に時勢に関し真道に
に紀に無し成人も制勢者人也と申せし如く国家を
駕御を新し御は真の道に従ひ不従に強弱に勢に
若し此道とは我　神道は
天皇は君を以
皇国を治め給ひ億兆の人民は君を以奉仕可仕為に有人に
守り給ふ為に先初めに心鵠を立て且
神霊頼を幸ち給ひ神人和合し保祐寿命貴行を励む事容易
此故　一度此　神教を信文仕ひ奉ては婦女も簡易に

して真道を奉へ分限を守り黄帝の意に帰し国家の費用
と相成孔孟の学問も独り真域の理を攝識に均しき
我邦のみも奉へ恐分相應に黄徳を励み
皇室を保護仕候志を定め作て取り申し候
神道に教導し書に垂序度 神代作事故同と自越と
正理相違り作清共唯大らかすして人に黄踐を給く
之影響教論又は眼前の理を以小説に泊り作教
言葉しやくに世人に為に耳近く垂序度作故に 今人親王
清水宮云に中分孔孟の道を以一方に右翼と仏学を
以て一方に左翼と作清云中神
神道益黄光を生じ古道従前世上に流布仕候不謂
堂加神道理学神道抔に偽教に教に亦御繁なるさ
心真に理に法一なるに随分見を以巻図同軌規則を
布置に教化を学へく仕候時に農漁婦童に至迄法
不迷一列に真に大和魂を奥記に上下協同に
方向を奉へ国民業を安んに

皇上ハ御為ニハ財命を不惜忠勇節義を重んじ吏人ハ
自ら苞苴私曲を戒め百官ハ勤
王ニ級換相顯ル　御上ハ褒歎ニ巷議を被為免越て
官庫ニ財ハ有餘ニ成り不震ニ備ハ固若民ニ恩澤ハ
父子天然ニ情ニ厚く相成り然上ハ平日ハ勿論如何成
世変非常出来り天下を騒動し安さ亡国何ニ恐る
ニ足らんや然彼後ハ洋学洋技益相翼ニ実用相立
國閉ニ有益ニ成外国交際も寛意を以御情ケ公明遊
作法ニ出来作法を美
ル御御国振ニ感服仕覬覦ニ念頭も自然ニ相消
ル御御国振ニ感服仕覬覦ニ念頭も自然ニ相消
作為ニ出ずんぶ
神慮ニ随ヒ仮初ニ稱して
朝貢を捧け奉仕ハ振ニ御御国出来ず中時迄も不絶
作為ニ於てこそ
皇威を海外ニ赫輝せしめハ寛境ニ御座作ル安御座国閉ニ
民心義勇ニ満国なるさる中ニ御交際ハ急角我ニ柔弱

心法と彼が猛威と最も無温言厳籍を以表裏し
取扱ひをいふ〜表は和親を薄き形と内心は常に怒恋を
懷しは故真し通信不行動もすれば混雑し為に侵を
門口〜所時も安眠を不得困疲労して自ら
乾形〜通り可申候今般御條約御改革に付而は
邪教弘方〜成を無出可申は兵乱御拒絶相成
可申は尊き御命
勅許無御座候迚彼が宿志消教仕同愛氣怪を以
御誘〜を以て申は同是亦第四
神道を以国民を感化し時に応じ動揺〜撰定御
座候教化〜御〜民心に透徹仕候時は容易に動
搖さ者に天心〜一向宗寛永〜鴻原賊徒は左道〜
教なるも頗る一段〜勢強く況や
天津神真心〜教化を以親切に勧化仕候時は固有〜義氣
門之孟軻は一支〜義氣も天地〜間塞候と申候
國国〜人民協同一致して真上

神明に　帰加護を享蒙いたす百姓に外敵も窺ふ事一出来
不申は彼西洋各国も往古は国弱く俗界に多く紛擾
し学者漸く相開作に随ひ神祇に理を窮め人道
正義を発明いたし唯さのみ道を以規則とし教化を
事とし国務に弟に強大を僅に十は其門に至り
四海に慶賀之代新に治産作業教化に行届は国は常に
堅固に而且教化局収納に財帛は自然と溢を致有
厳入りも教信に治産作業ともに当時亜墨利加と合衆国
英吉利西亜等漸生拡充別に自余に国に教化に伊佛那
西は近代迄に教化相表裏に終に寄漏生に非ざるは
なく彼は何とも邪とし教親に
神道に正教と同日に論に治産に彼国に
こゝに正教と尊信仕に教化に民心を得特に
同胞に治産に加に
神道は自国固有正傳に真教
なるに一度光を得て及びては各人皆失ひ為
本源を再び得に暗に明に帰し邪を離れ正を忘に

真の貴き所

皇室を愛重可仕は勿論聖教を捨棄く
他の侮辱を受国家を傾敗を招のみとも歎い貴以
不堪切歯腐心仕度は
八幡大御神之 御託宣にも我国侍者道を濟人
ふかくは神霊震怒して其祈を徳うび時機を不恐
心に奉祈せば我真の源を求て御国人は
依て一日も早く

神道教化 御漢古法為遵作根底額上作既に玄秋
以来の陸奥遠寄に源深し命相俱に此は嘉早
朝廷 御徳を遵し五作弥盛強に侍兼斯
作ふ遠に 御威厳に御宗を御作の人富に数
大事に成り可申は是は長崎近傍蠻民に固執仕は
愚情と遠び不容易奸謀に御座作為の近日に
情態に白は交易に付白無掌に無を生
不申と甚と無忘仕作候に御座作猶又今般西洋

女教師を雇ひ入し後ハ互相成ハ有るも彼等ハ
奸計を使又一層を得作逆謀悪を以間隙も殺
慢と兼知恥を以間見又未然を防く術第要なるものハ
我か入費を出して彼か奸謀を助け作て相変りて中ハ
恵の世界ハ大教を開理し安成事邪教しなと
なる者ハ安を作度ハ必ず見を陥しハ道ハ唯我古来
神道外ニハ安を作度ハ什邪教さへ取捨さ無作滅ハ
必ず行外交盛と相成作共

皇国ハ高し威益恭安疑作候し什神道ハ為国を
思御し邪教を壓抑て仕為し安とし玉愛と仕見を
以て教育仕ハ得ハ安徳和化し候ハ而論外ハ各民
之支も不為して自然と国為民是共強く相成作
基を作度作物其上改刑法令を以定法有百官
各協同して委任し職を行書ハ事務を為ハ賤民
関り知ずべき候を安を作度ハ得ハ徳本也財末也と
本文も作度ハ得ハ何を教化を為ハ事ハ国家し

亟要に存度作遂百千餘年に深習積重て浮薄
俗利相趨りは邦国之人民を山村婦女子に至る貧徳に
勧化可仕とて第八迂闊儒深腐之頑説を今世少文の
弊施行迂遠成紙上に空論也とて批判を蒙り下
作得共已例に教化に乖を知ざる儒生に論
説詳に存度は夫地人鄙者に浪りは真道に教化
用し糧食と同く一日も欠べからざる物と存度
作得共規則乖違に置きを得作時は苟も弊行
ものと存度は乖違は故前は功毒に性を不安調摂養生
法を失ひは故に痼疾を生に漸に元気衰耗仕作
不今より養生に規則を立調味を正くして食料
仕作時共本漫無疑事に存請合仕は依て利除窮り
貴效経験に古真神道に心魂共修身進徳
之文宣教に規則等発揚顕亟に得て貴地に之用
に為愚文に為は板行の弊書に乖も存度は間今日近去
不奉持作為右愚策

伊勢受くること　伊勢味方為　仰付下いつく其節詳細

遂

参詣猶不相當しかるべ可奉仰

天哉作因　宮殿し古史諸神社し神秘傳来等も

不少可有作度作と付其精微蘊奥し條目ハ特と師範

家伊人撰之上寃求為遂　審議討論之上宗旨貴し

教規可為之儀専要し作儀と作度作随而形儀

宮位俸禄を要と貪り作私願ハ御無作度作度

什要件

造り民業為遂作ハ秘資論を試亜作儀と付何年相遂

微職と為　石仕法下設亜奉願上作たる得共

国家之　伊為と身命を抛ち粉骨奏乞仕

神佑と

皇威とこ依り猶宣教方法宮負し作指揮を請資切し

基礎相立奉備

慶賀之為奉上作ル　一時と成功を奏し可申儀ハ不相叶

作業を進くるを拾ヶ年門外ニハ天晴美國を双し
御國旗美世不拘し大基礎相固り作成ハ嬉しと思して観る
がゆくこと作産の間何分
御英断を以御必　御熟慮　御採用之上
御開市式　御出張千求美御奉渇重作猶要細し成志
賛意恩奉し及ふ事と安作産業を餘情ハ
廟堂　御老練し　御方く　御慰察可仕下成と奉御
重鄙文野言を不恐言上仕以上

不可有其産汗産作此段　伺執奏奉願上仕仍不堪
恐惶之至頓首頓首謹死謹死

明治五年　申　三月

肥前國佐賀郡長崎
四等次平吉事
河邨真造

辨事御中

414
A 4097
2

漢書

肥前國彼杵郡
長崎縣

元寇通事潛筆者
[illegible]

阿部真造惇信
南甲子拾壱歳

大正十一年四月
限侯爵邸寄贈

彩色八代祖四方八郎[illegible]者肥前打爾郡[illegible]同國長崎[illegible]
[illegible]紙以来代々唐通事潛筆者相勤彩色八何年
國家に御為大切を[illegible]志那常に有し御儒学御行仕
候潛筆却而故障之義に付[illegible]備財を[illegible]撰武從者[illegible]
長崎近傍諸[illegible]村[illegible]引移り[illegible]指南[illegible]村役[illegible]得仕り[illegible]

政治法家の作業を補佐し
素志は相心不申ものと
ふの信仰いつし近来佛国教師誘導を信じ国村に
為り近村近国漸次延てし国より外交大意は一事に
有し彼有益を防禦いつ術策を立て
皇国に帰依度大なりんと仏文社清通時幕府に
政治中に分ち採用委任来てより毒気を
小森浦殿の家臣に田井良助物と申人と出会談之
仕り同じ人に寄て文読ませ佛来歴を
執奏し教に周旋可致旨に申上仏方を
仕りまして其貴を不得其位に者と縁組とし或は
書を借り説を申り其実を求まし
ま例とし去る慶應三年三月に天皇崩御
入江侯に随信し名を彫り物を賜ま洋人始め
安坂に二年間汗来し情通慶喜に弘法
極に奸策に仕組為悪に接し彼国に訳

霊露し深汗も兼知仕奉と

皇国し深沉八邪教と能御くと御のざるとより外と

国体を乱事を以今般

御維新以来　御上も此一事を思召し　御心を苦労

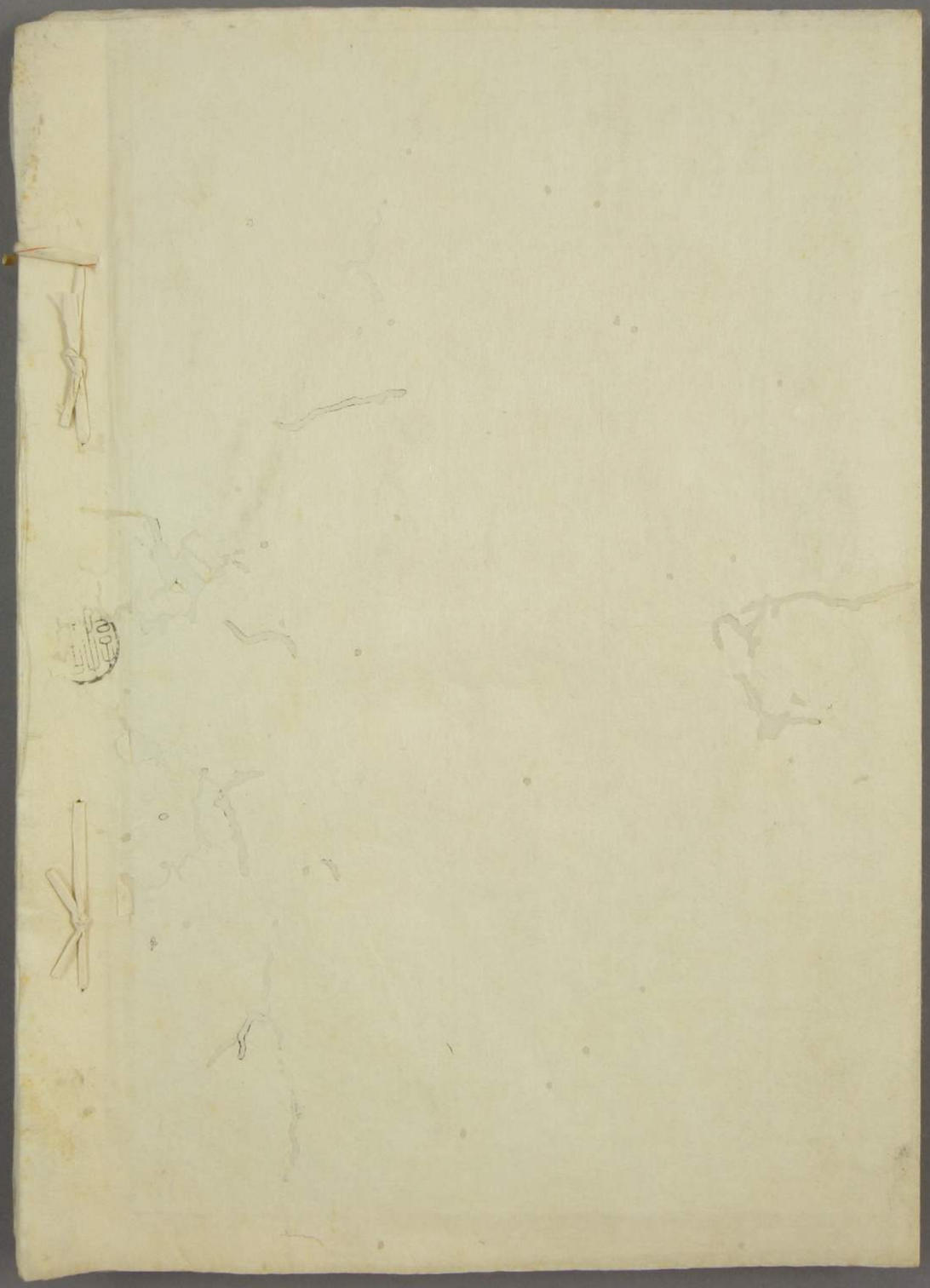
仕候て書上し論と外形し御来を国諸侯し論策も

多く世間に流布し皆何れも皆を論て抗くがゆく的中

不仕仕候し今般出府仕別紙し通建言仕候に付度仕

猶委細し儀八追て　御吟味之節具に御言奉申

上仕候可仕仕候に付以御書、申上以上

中
二月

河邨真[illegible]